主題科目－再編の検証－

葛 城 浩 一 （大学教育開発センター）

1．はじめに－主題科目の検証の必要性－

主題科目とは、「複数の授業科目の主題性を明確にした探求課題を軸として編成され、さまざまな学問領域における知識の、一定の主題のもとでの新たな「総合」」[1)]を目的とする授業科目群である。

主題科目は、1995年度に初めて導入された。この時点では主題は3タイプ×４主題の12主題で構成され、各主題あたり４つの講義科目が用意されていた。この体制は4年間続いたが、主題の趣旨・目標が十分に実現されていないことが調査から明らかになったことを受けて、主題の見直しが行われ、1999年度からは、「人間とテクネー」「歴史と現代」「地域と環境」という３つの新主題が設定されることになった[2)]。2004年度からは香川医科大学との統合がなされたが、全学共通科目に関しては、(旧)香川大学のカリキュラム構成を維持し、一部のカリキュラム改編にとどめることとした。そのため、主題科目に関しては、先述の３主題に新しく構成された「生命と医療」を加え、４主題となった。

しかし、例えば、新規に設定された「生命と医療」という主題を担当する教員、及びそれを受講する学生の大半は医学部に所属する教員・学生であり、「さまざまな学問領域における知識の、一定の主題のもとでの新たな「総合」」という主題科目の目的にそぐわない等、香川医科大学との統合時の両大学間のカリキュラム運営・実施体制の認識の齟齬が明らかになってきたため、主題科目を含む全学共通科目のカリキュラムを見直すこととなった。

2004年度末には大学教育開発センター運営委員会の下に、「全学共通教育のカリキュラム改革ワーキング・グループ」が設置され、2006年度からの全学共通教育カリキュラム改革に向け、カリキュラムの理念及び内容について、計８回の会合をもち検討が続けられた。またこの間、全学教員アンケート調査も実施し、この調査結果も参考にしながら、全学共通科目が再編されることとなった。

主題科目については、それまでの４主題を改編し、「人間と生命」「人間と文化」「テクネーと社会」「歴史と現代」「国際・地域」「環境・生活」の６主題が設定され、その他に特別主題として「瀬戸内」「人生とキャリア」「健康」が設定されることとなった。

表１は、これまで述べてきた主題科目の変遷を表にしたものであるが、今回の主題科目の再編は平成11年の再編以来の大きなものであることが改めてわかるだろう。果たして再編後の主題科目はうまく機能しているのであろうか。本稿では、カリキュラム評価や授業評価等の結果を用いながら、主題科目の履修システムに対する評価、授業内容に対する評価、主題科目の理念と提供されている授業との関連性に対する評価という３つの観点から、その検証を行いたい。

表１．主題科目の変遷

平成７年－	平成11年－	平成16年－	平成18年
Ａタイプ Ｂタイプ Ｃタイプ	主題Ⅰ「人間とテクネー」 主題Ⅱ「歴史と現代」 主題Ⅲ「地域と環境」	主題Ⅰ「人間とテクネー」 主題Ⅱ「歴史と現代」 主題Ⅲ「地域と環境」 主題Ⅳ「生命と医療」	主題Ⅰ「人間と生命」 主題Ⅱ「人間と文化」 主題Ⅲ「テクネーと社会」 主題Ⅳ「歴史と現代」 主題Ⅴ「国際・地域」 主題Ⅵ「環境・生活」 特別主題「瀬戸内」 特別主題「人生とキャリア」 特別主題「健康」

２．分析方法

まず、分析対象となるのは、2006年度の主題科目を履修した学生（主に１年生）である。その履修状況については表２を参照されたい。なお、分析に際しては、2005年度の主題科目を履修した学生を比較対象として用いる。

表２．主題科目の履修状況

	教育学部	法 学 部	経済学部	医 学 部	工 学 部	農 学 部	合 計
主 題 Ⅰ	62	10	29	76	13	59	249
主 題 Ⅱ	92	23	47	24	20	8	214
主 題 Ⅲ	1	6	26	10	143	3	189
主 題 Ⅳ	37	72	51	10	15	7	192
主 題 Ⅴ	27	39	110	11	12	2	201
主 題 Ⅵ	4	8	28	18	68	85	211

使用するデータは、2006年７月に行われた前期分の授業評価（以下「データ１」と表記）及び10月に行われた平成18年度新入生調査（以下「データ２」と表記）である。比較対象として用いるデータは、2005年７月に行われた前期分の授業評価及び2006年１月から２月に行われた後期分の授業評価（以下「データ３」と表記）、2006年１月に行われたカリキュラム評価（以下「データ４」と表記）である。

以下の分析は、前述のように、主題科目の履修システム、主題科目の授業内容、主題科目の理念と提供されている授業との関連性の３点について行うが、その際、主題科目の履修システムに関してはデータ２とデータ４を、主題科目の授業内容に関してはデータ１とデータ３を、主題科目の理念と提供されている授業との関連性に関してはデータ２を用いる。なお、データの比較に際しては、特に主題科目の履修システムについては、調査時期が異なるために必ずしも適切ではないことを付記しておく。

3．主題科目の検証

3－1．履修システム

(1) 履修方法

今回の主題科目再編のもっとも大きな変更点のひとつは設定される主題の数である。先述のように、4つから6つへと主題の数が変更したわけであるが、この点について学生はどう評価しているのであろうか。

表3は「現在の主題科目の履修方法は、6つの主題の中から1つの主題を選択し、決まった1主題の中から授業科目を履修するシステムを採っていますが、このことについてどのように思いますか」という問いに対する回答状況を示したものである。

「大変良い」との回答は3.4%と極めて低いものの、「まぁまぁ良い」をあわせた肯定的回答は51.6%と半数を越えている。2005年のカリキュラム評価では43.0%であるから、評価自体は良くなっていると考えられるが、その一方で、「大変良い」との回答は2005年の方が高く（2006年：3.4%＜2005年：9.6%）、「まったく良くない」との回答は2006年の方が高い（2006年：9.5%＞2005年：4.0%）ことには留意する必要があろう。

なお、主題別にみると、特に主題Ⅰ、Ⅱ、Ⅴはこの点についての評価が相対的に高いが、Ⅲ、Ⅳ、Ⅵでは低い。これは、主題の割り振りが一部起因しているものと考えられる。今回は主題Ⅰの人気がずば抜けて高く、第1希望に373人の学生が登録していたため、約3分の1にあたる124人の学生については第2希望に移ってもらうことにした。そのため、第2希望の主題に満足しない学生は主題科目の履修方法に対して否定的な評価をしたものと考えられる。

表3．主題科目の履修方法

		06年							05年
		主題Ⅰ	主題Ⅱ	主題Ⅲ	主題Ⅳ	主題Ⅴ	主題Ⅵ	全　体	全体
主題科目履修方法	大変良い	11 5.0%	12 6.0%	3 1.7%	3 1.7%	5 2.7%	5 2.6%	39 3.4%	195 9.6%
	まぁまぁ良い	120 55.0%	99 49.5%	72 41.1%	82 46.6%	103 55.1%	7 40.3%	555 48.2%	681 33.4%
	あまり良くない	70 32.1%	71 35.5%	77 44.0%	73 41.5%	69 36.9%	8 45.4%	449 39.0%	1083 53.1%
	まったく良くない	17 7.8%	18 9.0%	23 13.1%	18 10.2%	10 5.3%	2 11.7%	109 9.5%	81 4.0%
合　　計		218 100.0%	200 100.0%	175 100.0%	176 100.0%	187 100.0%	19 100.0%	1152 100.0%	2040 100.0%

(2) 開講数、単位数

表4は主題科目の開講数、単位数の規模についての問いに対する回答状況を示したものである。開講数、単位数については各主題による差が生じるものではないので、ここでは全体の値のみを示している。

まず開講数については、「適正である」との回答が65.8%であり、2005年のカリキュラム評

価と同等の値である。「少なすぎる」との回答が32.7%であり、これは2005年のカリキュラム評価よりも５%程度大きい。主題科目の開講数は再編前の2004年度で58科目、2005年度で57科目であったのに対し、2006年度は53科目と４科目少なく、これが回答状況に反映されたものと考えられる。

主題科目の単位数については「適正である」との回答が89.4%であり、2005年のカリキュラム評価の80.2%よりもさらに高い値を示している。2006年に比べ、2005年で「多すぎる」との回答が多かったことに鑑みれば（2006年：4.7%＜2005年：15.3%）、教育学部、法学部、医学部医学科、農学部では、主題科目の履修要件が再編前の６科目12単位から再編後の４科目８単位になったことで、主題科目の履修要件が大幅に緩和されたことが学生に評価されたものと考えられる。

表４．主題科目の開講数、単位数

	開講数		単位数	
	06年全体	05年全体	06年全体	05年全体
多すぎる(大きすぎる)	16 1.4%	116 5.8%	53 4.7%	308 15.3%
適正である	752 65.8%	1347 66.8%	1013 89.4%	1618 80.2%
少なすぎる(小さすぎる)	374 32.7%	552 27.4%	67 5.9%	92 4.6%
合　　計	1142 100.0%	2015 100.0%	1133 100.0%	2018 100.0%

(2) クラスサイズ

表５はクラスサイズの規模についての問いに対する回答状況を示したものである。この結果をみると、「適正である」との回答が64.5%であり、これは2005年カリキュラム評価の69.8%よりも５%程度低い値である。こうした結果には、先述の2006年度の開講科目数の減少によって、１クラスあたりの受講者数が増加したことが起因していると考えられるのだが、実際はそういうわけではない。

表５．主題科目のクラスサイズ

		06年							05年全体
		主題Ⅰ	主題Ⅱ	主題Ⅲ	主題Ⅳ	主題Ⅴ	主題Ⅵ	全　体	
クラスサイズ	大きすぎる	65 30.8%	52 26.3%	32 19.0%	48 27.6%	61 33.2%	60 31.1%	318 28.2%	509 25.3%
	適正である	130 61.6%	132 66.7%	113 67.3%	119 68.4%	112 60.9%	122 63.2%	728 64.5%	1404 69.8%
	小さすぎる	16 7.6%	14 7.1%	23 13.7%	7 4.0%	11 6.0%	11 5.7%	82 7.3%	99 4.9%
合　　計		211 100.0%	198 100.0%	168 100.0%	174 100.0%	184 100.0%	193 100.0%	1128 100.0%	2012 100.0%

表６は主題科目の受講者数の平均値とその標準偏差[3)]を示したものである。この結果をみると、全体の平均値だけでなく、標準偏差についても2006年度の値が2005年度のそれを下回っていることがわかる。すなわち、開講科目数が減少したにもかかわらず、１クラスあたりの受講者数は減少しただけでなく、受講者が特定の授業に偏る傾向も緩和されているのである。

表６．主題科目の受講者数の平均値と標準偏差

2005年度主題科目		
	平均値	標準偏差
主題Ⅰ	178.0	92.4
主題Ⅱ	143.9	34.7
主題Ⅲ	215.2	76.1
主題Ⅳ	110.2	66.9
全体①	163.0	80.3
全体②	161.7	80.1

2006年度主題科目		
	平均値	標準偏差
主題Ⅰ	194.1	72.5
主題Ⅱ	158.7	78.3
主題Ⅲ	121.9	61.2
主題Ⅳ	151.9	69.9
主題Ⅴ	137.3	55.1
主題Ⅵ	141.5	46.8
全体①	150.8	65.5
全体②	151.6	65.4

注：全体①は特別主題を含まない値、全体②は特別主題を含む値。

なお、表７には「主題科目の受講者数が多い場合の受講調整について、どのように思いますか」という問いに対する回答状況を示している。もっとも回答が多かったのは、「本人の受講希望を優先し、受講調整すべきでない」の42.7%であるが、2005年のカリキュラム評価と比較すると、「外に溢れ出るような場合は、受講調整すべきである」が32.7%から26.7%へと減少し、その減少分が「本人の受講希望を優先し、受講調整すべきでない」に流れていることがわかる。こうした結果は、外に溢れ出るような極端な授業が減っていることを示唆するものであり、学生の受講環境が改善の途にあることを示すものといえる。

表７．主題科目の受講調整

		06年							05年 全体
		主題Ⅰ	主題Ⅱ	主題Ⅲ	主題Ⅳ	主題Ⅴ	主題Ⅵ	全　体	
受講調整	本人の受講希望を優先し、受講調整すべきでない	99 46.0%	88 44.2%	75 44.4%	85 48.6%	65 35.5%	7 37.3%	48 42.7%	753 37.9%
	外に溢れ出るような場合は、受講調整すべきである	65 30.2%	54 27.1%	52 30.8%	36 20.6%	47 25.7%	4 25.4%	303 26.7%	650 32.7%
	教室の座席数以上の受講者は調整すべきである	41 19.1%	39 19.6%	34 20.1%	34 19.4%	50 27.3%	4 25.4%	24 21.8%	409 20.6%
	受講者数に関係なく授業担当教官に任せてよい	10 4.7%	18 9.0%	8 4.7%	20 11.4%	21 11.5%	2 11.9%	100 8.8%	177 8.9%
合　　計		215 100.0%	199 100.0%	169 100.0%	175 100.0%	183 100.0%	19 100.0%	113 100.0%	1989 100.0%

3－2．授業内容

次に主題科目の授業内容に対する検証を行う。前述のように、ここでは授業評価の結果を用いる。表8に示すように、ほとんどの項目で2005年度よりも2006年度の方が高い値を示しており、授業内容に関しては再編前よりも概して高い評価を受けているといえる。以下では授業評価の枠組みにしたがって、その結果を概観したい。

(1) 自学自習の促進度

このカテゴリに含まれる問いは「一週間のうち、この授業に関して授業以外にどれくらい時間を使いましたか」（以下「学習促進」と表記）と「この授業に熱心に取り組みましたか」（以下「学生の熱心さ」と表記）の2つである。

「学習促進」に関しては、1.69と低い値を示しており、主題科目の授業の多くが授業内で完結する構造になっていることがうかがえる。2005年の値と比較すれば値は上昇しているため、徐々に自学自習が促されるようにはなってきているが、表9の主題科目以外の授業評価の結果と比較すると、それでも依然としてその他のカテゴリよりも自学自習を促す構造になっていないことがわかる。

また、「学生の熱心さ」に関しては3.60であり、2005年の前期の値が3.27、後期の値が3.54と上昇傾向にあることに鑑みれば、全体的に学生の熱心さを喚起する授業が行われているものと推察される。なお、主題科目以外の授業評価の結果と比較すると、この点についてはいずれのカテゴリでも値の上昇傾向が確認できる。

(2) 授業への取り組み

このカテゴリに含まれる問いは「教員の授業に対する熱意が感じられる」（以下「教員の熱意」と表記）、「教員の話し方は明瞭で聞き取りやすい」（以下「明瞭な話し方」と表記）、「学生の理解度を把握して授業を進めている」（以下「理解度の把握」と表記）、「視聴覚機器の利用や板書が効果的である」（以下「効果的なプレゼン」と表記）の4つである。

これら4つの項目についてはいずれも、2005年度の前期、後期、2006年の前期と、一貫して値に上昇傾向がみられる。主題科目以外の授業評価結果でいずれの項目についても上昇傾向がみられるカテゴリは存在しない。それはすなわち、主題科目がまだまだ改善の余地を示すことの裏返しではあるかもしれないが十分評価には値しよう。

特に「教員の熱意」に関しては4.13と授業評価の項目中もっとも高い値を示しており、2005年の時点でもすでに4.01、4.04と高い水準であるにも関わらず、高止まりすることなくさらに高い値を示している点に教員の努力がかいまみえる。これは教養ゼミや健康・スポーツを除く講義群の中でもっとも高い値を示していることからも明らかであろう。

(3) 到達目標の達成に向けた授業

このカテゴリに含まれる問いは「シラバスに、授業の到達目標がわかりやすく書かれている」（以下「到達目標の明示」と表記）、「授業の到達目標の達成に向けて、授業全体が組み立てられている」（以下「目標と授業の関連」と表記）、「授業時間外の学習（予習復習等）を促す工

夫がなされている」（以下「予習復習の促進」と表記）、「この授業は、将来の自分にとって有益である」（以下「将来の有益さ」と表記）の４つである。

これら４つの項目については、「将来の有益さ」については値の上昇傾向がみられるが、その他の項目は2005年の値と同水準である。特に「到達目標の明示」に関しては主題科目以外のカテゴリにおいても一貫した上昇傾向がみられない。この点に関して改善の余地は果たしてあるのか、それともないのか。「目標と授業の関連」、あるいは次に示す「到達目標の達成」の前提ともなるだけに検討の必要があるだろう[4)]。

(4) 到達目標の達成度と満足度

このカテゴリに含まれる問いは「あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか」（以下「到達目標の達成」と表記）、「あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか」（以下「総合的満足度」と表記）の２つである。前者は事実上の教育成果、後者は教育成果の代理指標と考えられる。

「到達目標の達成」に関しては3.45であり、2005年の値と同水準にある。また「総合的満足度」に関しては3.77であり、2005年の前期3.62、後期3.71と一貫して上昇傾向にあるといえる。主題科目以外の授業評価の結果に鑑みれば、これらの「教育成果」の改善にはまだ幾分の余地があるものと考えられる。

(5) その他

このカテゴリに含まれる問いは「授業の受講者定員数は適切だと思いましたか」（以下「定員数の適切さ」と表記）、「この授業は、将来の自分にとって有益である全学共通（教養科目）科目としてふさわしい内容である」（以下「共通科目としての適切さ」と表記）の２つである。

これら２つの項目については、いずれも一貫して上昇傾向がみられる。「定員数の適切さ」に関してはクラスサイズのところで検討したのと同様の傾向が確認できる。もうひとつの「共通科目としての適切さ」に関しては3.98という高い水準にある。しかし、ここでの評価はあくまで「全学共通科目」としての適切さに対するものであり、主題科目としての適切さに対するものではない。本稿の主課題ともいえる主題科目としての適切さについての分析は次節で行いたい。

表 8．主題科目の授業評価

		06 年 前期							05 年	
									前期	後期
		主題Ⅰ	主題Ⅱ	主題Ⅲ	主題Ⅳ	主題Ⅴ	主題Ⅵ	全体	全体	全体
(1)	学習促進	1.55	1.99	1.67	1.83	1.64	1.69	1.69	1.58	1.59
	学生の熱心さ	3.77	4.02	3.43	3.40	3.41	3.43	3.60	3.27	3.54
(2)	教員の熱意	4.36	4.40	3.71	3.99	4.07	4.07	4.13	4.01	4.04
	明瞭な話し方	4.23	4.31	3.54	3.61	3.85	3.78	3.93	3.76	3.88
	理解度の把握	3.76	3.93	3.19	3.17	3.20	3.32	3.47	3.36	3.43
	効果的なプレゼン	3.89	4.15	3.60	3.06	2.41	3.61	3.64	3.41	3.62
(3)	到達目標の明示	3.84	4.10	3.60	3.56	3.63	3.60	3.73	3.75	3.73
	目標と授業の関連	3.89	4.14	3.60	3.56	3.57	3.67	3.74	3.73	3.73
	予習復習の促進	2.96	3.29	2.87	2.94	2.69	3.06	2.95	2.80	2.96
	将来の有益さ	4.04	3.94	3.62	3.48	3.57	3.43	3.73	3.58	3.71
(4)	到達目標の達成	3.64	3.85	3.40	4.79	3.28	3.22	3.45	3.35	3.47
	総合的満足度	4.06	4.26	3.64	3.41	3.49	3.48	3.77	3.62	3.71
(5)	定員数の適切さ	3.90	4.10	3.76	3.92	3.77	3.84	3.86	3.64	3.81
	共通科目としての適切さ	4.24	4.32	3.72	3.83	3.74	3.77	3.98	3.92	3.94

注：表中の値は平均値。1から5までの値をとり、5に近いほど評価が高いことを意味する。
網掛け部分は一貫して明確な上昇傾向がみられるもの。表9も同様。

表 9．主題科目以外の授業評価

		共通			教養ゼミ			既修外国語			初修外国語			健康・スポーツ		
		05年		06年	05年		06年	05年		06年	05年		06年	05年		06年
		前期	後期	前期	前期	後期	前期	前期	後期	前期	前期	後期	前期	前期	後期	前期
(1)	学習促進	1.94	1.69	1.96	2.33	2.22	2.43	2.97	2.91	2.57	2.46	2.41	2.89	1.48	1.55	1.48
	学生の熱心さ	3.25	3.33	3.46	3.94	4.04	4.14	3.70	3.79	3.90	3.68	3.77	3.84	4.44	4.49	4.57
(2)	教員の熱意	3.88	3.91	3.94	4.16	4.19	4.22	3.93	3.90	4.08	3.97	3.90	4.00	4.43	4.49	4.52
	明瞭な話し方	3.51	3.72	3.59	4.10	3.93	4.04	3.56	3.57	3.75	3.70	3.68	3.72	4.38	4.48	4.44
	理解度の把握	3.12	3.31	3.23	3.82	3.65	3.82	3.65	3.63	3.72	3.66	3.62	3.67	4.20	4.30	4.23
	効果的なプレゼン	3.19	3.24	3.26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(3)	到達目標の明示	3.66	3.61	3.61	3.92	3.92	3.87	3.76	3.71	3.76	3.69	3.68	3.76	4.10	4.17	4.02
	目標と授業の関連	3.56	3.57	3.59	3.98	3.80	3.96	3.75	3.76	3.85	3.66	3.62	3.70	4.22	4.20	4.16
	予習復習の促進	3.02	2.96	3.11	3.68	3.73	3.78	3.75	3.70	3.98	3.99	4.01	3.99	3.16	3.35	3.15
	将来の有益さ	3.45	3.56	3.51	4.11	4.04	4.15	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(4)	到達目標の達成	3.18	3.21	3.28	3.78	3.81	3.81	3.29	3.44	3.47	3.36	3.39	3.48	4.26	4.26	4.22
	総合的満足度	3.38	3.49	3.48	4.06	3.92	4.06	3.75	3.75	3.83	3.64	3.58	3.70	4.46	4.43	4.48
(5)	定員数の適切さ	3.66	3.68	3.74	4.32	4.34	4.31	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	共通科目としての適切さ	3.79	3.81	3.81	4.14	4.14	4.16	—	—	—	—	—	—	—	—	—

なお、表10に主題ごとの標準偏差を示しておく。この結果をみると、特に主題ⅡとⅥで標準偏差が大きいことがわかる。特に主題Ⅱについては、表8からもわかるように、いずれの項目についても際立って高い評価がされているが、これは主題Ⅱの授業科目のすべてにおいて平均して高い評価がされているわけではなく、主題Ⅱの一部の授業において極めて高い評価がされ

ていることを示している。

表10. 主題ごとの標準偏差

		主題Ⅰ	主題Ⅱ	主題Ⅲ	主題Ⅳ	主題Ⅴ	主題Ⅵ
(1)	学習促進	0.211	0.579	0.136	0.322	0.125	0.397
	学生の熱心さ	0.193	0.511	0.211	0.295	0.150	0.383
(2)	教員の熱意	0.201	0.259	0.234	0.406	0.175	0.373
	明瞭な話し方	0.272	0.255	0.350	0.331	0.514	0.685
	理解度の把握	0.287	0.384	0.173	0.304	0.259	0.598
	効果的なプレゼン	0.350	0.157	0.462	0.434	0.537	0.821
(3)	到達目標の明示	0.082	0.230	0.159	0.141	0.131	0.379
	目標と授業の関連	0.121	0.265	0.113	0.157	0.258	0.510
	予習復習の促進	0.235	0.583	0.161	0.394	0.074	0.790
	将来の有益さ	0.164	0.516	0.231	0.456	0.269	0.413
(4)	到達目標の達成	0.156	0.419	0.144	0.250	0.180	0.363
	総合的満足度	0.254	0.263	0.213	0.253	0.293	0.606
(5)	定員数の適切さ	0.164	0.258	0.219	0.284	0.282	0.388
	共通科目としての適切さ	0.137	0.115	0.184	0.164	0.252	0.521

3－3．主題科目の理念と提供されている授業との関連性

これまでみてきた履修システムや授業内容についての検証は、履修システムや個々の授業の点から主題科目の改善を目指す非常に重要なアプローチである。しかし、より重要なのは、履修システムや個々の授業の改善の総体によっては必ずしも実現されない、主題科目の理念が実現されているかという点についての検証であろう。

そこで以下では、主題科目の理念と提供されている授業との関連性をみていくことでその点についての検証を行いたい。果たして、主題科目の理念は個々の教員に共有されているのであろうか、またその理念に基づき個々の授業は提供されているのであろうか。主題科目としての適切性、同一主題科目間の関連性についての学生の回答状況から、これらの点について検証したい。

(1) 主題科目としての適切性

表11は「私が履修した主題科目の授業は、主題科目の授業として適切だった」という問いに対する回答状況を示したものである。「あてはまる」と「ある程度あてはまる」をあわせた肯定的回答は74.7%と高い値を示している（平均値では3.90）。概して主題科目としての適切性については高い評価が得られているといえる。

表11. 主題科目としての適切性

		06年						
		主題Ⅰ	主題Ⅱ	主題Ⅲ	主題Ⅳ	主題Ⅴ	主題Ⅵ	全　体
主題科目適切性	あてはまる	74 34.4%	60 30.2%	27 15.8%	47 26.9%	48 25.9%	37 19.2%	293 25.7%
	ある程度あてはまる	107 49.8%	99 49.7%	98 57.3%	80 45.7%	86 46.5%	88 45.6%	558 49.0%
	どちらでもない	22 10.2%	29 14.6%	30 17.5%	32 18.3%	39 21.1%	37 19.2%	189 16.6%
	あまりあてはまらない	10 4.7%	9 4.5%	11 6.4%	12 6.9%	11 5.9%	20 10.4%	73 6.4%
	あてはまらない	2 0.9%	2 1.0%	5 2.9%	4 2.3%	1 0.5%	11 5.7%	25 2.2%
合　　計		215 100.0%	199 100.0%	171 100.0%	175 100.0%	185 100.0%	193 100.0%	1138 100.0%

(2) 同一主題科目間の関連性

表12は「私が履修した主題科目の授業は、同じ主題の他の授業との関連性があった」という問いに対する回答状況を示したものである。先ほどの主題科目としての適切性の結果とは対照的に「あてはまる」と「ある程度あてはまる」をあわせた肯定的回答は44.2%と必ずしも高い評価が得られているわけではない。

これらの結果を総括して考えると、主題を構成する個々の授業レベルでは一定の評価がなされていたとしても、修学案内が謳う「さまざまな学問領域における知識の、一定の主題のもとでの新たな「総合」が企てられる」という主題科目の理念が実現されているとは言いがたい。同一主題科目間の関連性を学生が単に認識できなかったというのであれば事態はそう深刻ではないが、同一主題科目間の関連性がそもそもなかったというのであれば、この点に対する改善は急務であるといえる。

表12. 同一主題科目間の関連性

		06年						
		主題Ⅰ	主題Ⅱ	主題Ⅲ	主題Ⅳ	主題Ⅴ	主題Ⅵ	全　体
主題科目関連性	あてはまる	29 13.5%	19 9.5%	18 10.6%	10 5.7%	17 9.1%	21 10.9%	114 10.0%
	ある程度あてはまる	84 39.1%	68 34.2%	67 39.4%	54 31.0%	63 33.9%	53 27.5%	389 34.2%
	どちらでもない	64 29.8%	71 35.7%	43 25.3%	59 33.9%	66 35.5%	69 35.8%	372 32.7%
	あまりあてはまらない	29 13.5%	29 14.6%	31 18.2%	35 20.1%	29 15.6%	33 17.1%	186 16.4%
	あてはまらない	9 4.2%	12 6.0%	11 6.5%	16 9.2%	11 5.9%	17 8.8%	76 6.7%
合　　計		215 100.0%	199 100.0%	170 100.0%	174 100.0%	186 100.0%	193 100.0%	1137 100.0%

5．おわりに－主題科目の改善に向けて－

以上みてきたように、主題科目の履修システムや授業内容については概して再編前よりも高い評価を受けていることがわかる。このこと自体は十分評価に値することである。しかし、それはあくまで主題科目を構成する個々の授業の総体が評価を受けているだけであり、カリキュラムとしての主題科目が評価されているわけではない。特に同一主題科目間の関連性に対する評価が低いということは、主題科目の理念自体に対する教員のコンセンサスが得られていないことを示唆するものである。

現状では、主題科目の実施に際して、主題科目ごとにそれを担当する教員が集まり、その授業の方向性等についての議論が行われることはほとんどないようである。各主題のテーマの縛りだけがあって、授業内容については担当教員個人の裁量によるというものでは、主題科目がいかに再編されようとも、あるいは個々の授業に対する評価がいかにあがろうとも、主題科目の理念が実現されることはないだろう。

こうした問題は今に始まったことではない。理念的には、同一主題を構成する教員が集まって議論することに対して否定的に考える教員はいないだろう。しかし、現実問題として、授業時間以外にも相当の時間を割いて授業内容を調整していかなければならないと考えれば主題科目を担当することを忌避したくなる教員も少なくないと考える。勿論、授業を受ける学生のことを考えれば、教員にそうした甘えが許されるわけではない。担当教員の心理的・物理的障壁をできるだけ少なくするためにも、大学教育開発センターとしてもなんらかのバックアップをしていく所存である[5)]。

注

1）香川大学全学共通科目修学案内（教養教育）、2006、2頁。

2）この経緯については、「一般教育から教養教育そして全学共通教育へ」香川大学大学教育開発センター『香川大学教養教育研究』第8号（1－48頁）に詳しい。

3）標準偏差とは、あるデータの集まりの中で、個々のデータがそのデータ全体の平均値からどの程度かけ離れているかを表す尺度であり、値が大きいほど値のちらばりが大きいことを示す値である。

4）「到達目標の明示」との相関係数は、「目標と授業の関連」で0.692、「到達目標の達成」で0.489であり、両者の間には極めて強い相関関係がみられる。

5）そのための試みとして、12月5日のFD研修会では、主題科目ごとに集まって議論する機会を設けた。主題科目ごとの出席者数が十分でなかったため、比較的内容が似ている主題ⅠとⅡ、主題ⅢとⅥ、主題ⅣとⅤの担当教員で議論を行った。こうした機会が自発的な取組につながれば幸いである。